



TITLE:

ドイツの図書館史研究：現状分析 (京都大学生涯教育学講座シニアキ ャンパス実施記念号)

AUTHOR(S):

ヴォドセク, ペーター

CITATION:

ヴォドセク, ペーター. ドイツの図書館史研究：現状分析(京都大学生涯教育学講座シニアキャンパス実施記念号). 京都大学生涯教育学・図書館情報学研究 2005, 4: 265-274

ISSUE DATE:

2005-03-31

URL:

<http://hdl.handle.net/2433/43873>

RIGHT:

ドイツの図書館史研究：現状分析

ペーター・ヴォドセク 著

佐橋 恭子・金城 まりえ・川崎 良孝 訳

Library History in Germany: The State of the Art

Peter VODOSEK,

Kyoko SAHASHI, Marie KINJO, Yoshitaka KAWASAKI (tras.)

1. 研究は活発なのか

ドイツで最も重要な—そして唯一の—図書館史分野の書誌プロジェクトである『図書と図書館史書誌』(BBB=Bibliographie der Buch- und Bibliotheksgeschichte)の新刊には、「図書館」(Bibliotheken)という見出しのもとに約1,000項目が記されている。たとえドイツのものでない出版物と印刷物を差し引いても、ドイツ図書館史研究は繁栄しているという印象を受けるだろう。この書誌の存在自体が、繁栄の証拠のように思える¹⁾。しかし見かけは当てにならない。『図書と図書館史書誌』は1人の事業で、その人物が編集者、編纂者として開始した。この書誌に含まれているほとんどの出版物、モノグラフ、論文は組織的、体系的な研究成果ではなく、個人の興味、学生の論文、施設や個人を祝う記念刊行物(Festschriften)である。この事実、この種の業績の重要性や価値を減ずるものではないとしても、ドイツ図書館史研究がおかれている状況の兆候といえる²⁾。

2. 制度化と学術的地位の欠如

図書館史は高等教育や研究の場で当然の扱いを受けていない。1974年から1990年まで、ケルン大学には図書館学講座があった。この講座の担当者パウル・ケーグバイン(Paul Kaegbein)教授は、図書館史に大変に尽力された。しかし同教授の退職後、大学側がこの講座を中止してしまったのである。

ベルリンのフンボルト大学には図書館学科が依然存在しているものの、学科の規模はこの15年間徐々に縮小されてきている。現時点では、ベルリン市の破滅的な財政状況により閉鎖になりかねない。この学科は以前のドイツ民主共和国の時代のとき、図書館史を重視していた。しかし現在の学科はもはや図書館史に主な焦点をあてていない。もっとも、ドイツ民主共和国時代の図書館史の役割と状況については、この論文の範疇を越えている³⁾。

1970年代から、図書館情報学教育については、新しい型の高等教育機関が責任を負ってきた。英語では応用科学総合大学(Universities of Applied Sciences)で、いわゆる専門大学(Fachhochschulen)である。これらの大学の主な使命は研究ではなく、いわんや歴史研究ではない。ほとんどの大学が、専門科目として図書館史を放棄してきた。21世紀の初めまでに、

図書館史の輪郭形成に成功した唯一の応用科学総合大学は、シュトゥットガルトの図書館情報学大学であった。しかし状況が変化したため、この教育機関の将来は明確ではない。以前の独立した大学が他の大学と合併し、2001年9月に新しいメディア大学（Hochschule der Medien）となった。もちろん共働による利益もあるだろう。しかし、大学教育におけるすべての文化面は失われつつある。さらに、いわゆる「ボローニャ宣言」（Declaration of Bologna）のために、大学はカリキュラムの軽量化と講義数の削減を余儀なくされている。それゆえに、図書館史はシラバスから削除された。最後に最悪なことに、図書と図書館史の教授職は、2004年夏学期末に教授が退任後、取り消された。

3. 現在の動向

ドイツのすべての図書館情報学大学が、似たような近視眼的行動の影響を受けている。時代精神がこの残念な展開を助長し、この動きは国際的になっているようである⁴⁾。いやしくも図書館学の存在が許されるならば、情報学、情報経済学、それに情報、メディア、図書館の経営学に焦点が集まる。多くの学生は図書館史研究者として扱われた場合、就職に悪影響があると懸念している。歴史は一般的に人気のある主題なので、この傾向は独特のものと思える。大規模な文化史展覧会は多くの人を引きつけているし、新しい歴史博物館の数は依然として増加している。

4. 研究プログラムは中止された

「DFG（Deutsche Forschungsgemeinschaft）はドイツにおける学術研究のための公の中央助成団体である。したがってDFGは……（全国）研究財団（Research Foundation：アメリカの専門用語）に匹敵する。……法規によるとDFGは以下の任務を持つ。ドイツの大学や公立の研究機関で行われている研究事業を支援することで、全分野の科学や芸術に奉仕する。科学者同士の協力を促進する。ドイツの学術界と産業界との結びつきを育成、支援し、さらに外国の同僚仲間との協力を育成、支援する」⁵⁾。

DFGは1985年から特別研究プログラム「図書館史と図書史に関する資料の索引作成」を助成した。これは図書館史にとって大きな進歩と考えられた。1997-98年にプログラムが終了するまでに5,000,000ドイツマルクを投じ、約12件の研究プロジェクトが実施された。プロジェクトのなかには、非常に革新的なものもあった。DFGは1994-95年にプログラムの停止を決定したが、この決定は大変残念であった。プログラム終了の第一の理由は、前述の傾向にある。すなわち財政緊縮の時代にあって、資金を提供する機関や財団はITや図書館デジタル化のプロジェクトを好んだのである。第二の理由は、ある種の悪循環にあった。学術分野内で図書館史は強い立場になく、プロジェクトへの応募があまりに少なかった。それゆえ、DFGはプログラムを容易に中止できた。

それにもかかわらず、このプログラムは図書館史研究の質をかなり向上させた。文書資料の調査と索引作成、および件名を主体とした目録や所在一覧といった補助資料の出版は、資料を利用しやすくしたし、資料に注目を集めたりした⁶⁾。

5. 図書館史と図書史

図書館史と図書史は独立した学問分野なのであろうか。あるいはフランス語で「図書史」(*histoire du livre*)と理解されているように、いっそう包括的な学問の一部なのであろうか。この周知の問題を論じることは、本論文の範疇を越える。しかし大学によって力の入れ具合は相違するものの、図書史を扱っている大学を示しておく必要がある。

- ・マインツ大学 (University of Mainz)：図書学科 (Institut für Buchwissenschaft)
- ・エルランゲン・ニューレンベルク大学 (University of Erlangen-Nuremberg)：図書学研究コース (Studiengang Buchwissenschaft)
- ・ミュンヘン大学 (University of Munich)：図書学専門研究コースならびに学士研究コース (Aufbaustudiengang und Diplomstudiengang Buchwissenschaft)
- ・ライプツィヒ大学 (University of Leipzig)：コミュニケーション・メディア学学科での図書学ならびに図書経済学教授職コース (Profesur Buchwissenschaft und Buchwirtschaft am Institut für Kommunikations- und Medienwissenschaft)
- ・ミュンスター大学 (University of Munster)：図書学ならびに原典(原文)研究学科 (Institut für Buchwissenschaft und Textforschung)、修士課程「図書研究」は計画中

これらの大学は図書館史の排除を原則にはしていない。しかし教育と研究の主要な領域は、図書にまつわる全側面、出版、図書流通にある⁷⁾。

尊敬すべき「ドイツ書籍出版株式取引業者組合歴史委員会」(Historische Kommission des Börsenvereins des Deutschen Buchhandels)は1875年に創設され、20年間にわたって全5巻のシリーズ「19世紀、20世紀におけるドイツの書籍取引」(*Geschichte des deutschen Buchhandels im 19. und 20. Jahrhundert*)を準備してきた。第1巻1号は2001年、第1巻2号は2003年に出版された。この重要なプロジェクトにかかわったほとんどの著者が、前述した大学の教員である。いくつかの章で図書館史を取り上げているが、ほとんどが出版と流通との脈絡、とりわけ図書館の配布と収集の機能に重点をおいている⁸⁾。

6. 大学以外の機関

この混乱と不満足な状況に関して、大学以外の機関が学問的課題に応えることが重要となる。1979年以降、ドイツにおいて最も重要で活動的な機関は、ヴォルフエンビュッテルにあるアウグスト大公図書館の「ヴォルフエンビュッテル図書館史・図書史・メディア史研究会」(Wolfenbütteler Arbeitskreis für Bibliotheks-, Buch- und Mediengeschichte)である⁹⁾。この機関はアメリカ図書館協会の図書館史ラウンドテーブル、イギリス図書館・情報専門家協会(CILIP: Chartered Institute of Library and Information Professionals)の「図書館情報史グループ」、デンマーク図書館史協会(Dansk Bibliotekshistorisk Selskab)、国際図書館連盟の図書館史分科会に匹敵する。

少なくとも図書館史と部分的にでも関係がある他の機関は、既述の「ドイツ書籍出版株式取引業者組合歴史委員会」、ゲッティンゲンの「マックス＝プランク歴史学研究所」(Max-Planck-Institut für Geschichte)、「ライプツィヒ図書史研究会」(Leipziger Arbeitskreis zur

Geschichte des Buchwesens) などである。さらに詳細な検討は、本論文の範疇を越える。

今日のニーダーザクセン州にある小さな町ヴォルフエンビュッテルで、1572年にアウグスト大公図書館 (Herzog August Bibliothek) が創設された。この図書館は、300年前に「世界の8番目の不思議」と驚嘆されている。図書館は「アウグスト大公ブラウンシュヴァイク・リューネブルク子息 (1579-1666)」 (Duke August the Younger of Braunschweig-Lüneburg) という名前を持つ。アウグスト大公は蔵書数を約135,600冊に拡大し、当時最大の図書館にした。最も有名な館長は、博学な天才ゴットフリート・ヴィルヘルム・ライプニッツ (Gottfried Wilhelm Leibniz) (在職期間1690-1716年) と、詩人であり文芸批評家のゴットホルト・エフライム・レッシング (Gotthold Ephraim Lessing) (在職期間1770-1779年) である。この図書館は、近代初期ヨーロッパ文化史について、ほとんど完全な蔵書を築いてきた。このことが、中世から現在にいたる知性と文化の歴史研究、特に近代初期の研究の国際的研究拠点になった理由である。図書館の現代の発展を精神的に導いたのは、パウル・ラーベ (Paul Roabe) であった。ラーベはアメリカの研究図書館のような図書館を思い描いていた¹⁰⁾。

法規によると、アウグスト大公図書館は、ヨーロッパ文化史の研究を支援している。いくつかのラウンドテーブルや研究会 (Arbeitskreise) の助けを得つつ、幅広い文化プログラムや会議を組織している。図書館職員自身が研究を行い、その結果は図書館の雑誌に発表される。また国内外の学者や諸機関と協力している。提携している研究会は、いずれも当該分野における専門研究者が緩やかに結びついたグループである。これらのグループは独立しておらず、図書館の資金提供に頼っている。なおグループの目標は、国内外の協力関係を育成すること、それに研究者と図書館、研究者同士の接触を高めることである。そして大会、セミナー、シンポジウムを組織し、図書館の出版物に研究成果を出版している。

7. ヴォルフエンビュッテル図書館史・図書史・メディア史研究会

1975年5月27日にアウグスト大公図書館で開かれた会議で、「ヴォルフエンビュッテル図書館史研究会」 (Wolfenbütteler Arbeitskreis für Geschichte des Buchwesens) が発足した。「図書史」 (Geschichte des Buchwesens) は、幅広い意味で理解され、フランス語の「図書史」に匹敵した。そして——当然のことながら——図書館の歴史も含んでいた。しかし当初の会員のなかにいた図書館員が、「図書館史」 (Library History) という語をこの研究会の名称に含めることを主張した。それは「創設者」の予期しない状況で、合意の形成は不可能であった。それゆえ1979年4月25日に、別途に「図書館史研究会」 (Arbeitskreis für Bibliotheksgeschichte) が創設された¹¹⁾。それからおよそ20年を経過した1998年に、アウグスト大公図書館が「図書史研究会」を「図書館史研究会」と合併し、新しくも古い「図書館史・図書史・メディア史研究会」 (Arbeitskreis für Bibliotheks-, Buch-, und Mediengeschichte) にすると決定したのは皮肉である。1998年の時点では、70年代に反対した「創設者」の大部分は、引退か死亡していた。

「研究会」は、8人の専門家で構成される理事会が指揮する。2004年春の時点で、理事は以下である。

理事長：ヴォルフガング・シュミッツ教授 (ケルン大学図書館)

ペーター・ヴォドセク：ドイツの図書館史研究：現状分析

副理事長：ペーター・ヴォドセク教授（シュトゥットガルト・メディア大学）

事務局長：ヴェルナー・アルノルト博士（ヴォルフエンビュッテル・アウグスト大公図書館）

理事：ヨッヘン・ブリューニング教授（ベルリン・フンボルト大学）

理事：モニカ・エスターマン博士（フランクフルト・ドイツ書籍出版株式取引業者組合歴史委員会）

理事：ウルズラ・ラウテンベルク教授（エルランゲン・ニューレンベルク大学）

理事：ヘルヴィッヒ・シュミッツ＝グリンツァー教授（ヴォルフエンビュッテル・アウグスト大公図書館長）

理事：ラインハルト・ジーゲルト教授（フライブルク・イム・ブライスガウ大学）

理事会の最も重要な仕事は、毎年の大会やセミナーの計画と組織化である。大会は包括的な主題になる傾向があり、歴史に関心のある多くの人を引きつけようとしている。セミナーは、特定の学問的課題を扱い、少数の専門家がいっそう実質的な討議をする。こうした計画のほかに、要請があればシンポジウムも計画し、シンポジウムは外部の協力者が組織する場合が多い。

大会とセミナーの主題を選考する際、最も重要な規準は「研究志向」である。新しい研究成果を公表し、新しい研究主題を開始すべきである。当初は、時代区分で計画を設定していた。ルネサンス、啓蒙主義、19世紀、ヴァイマル時代、第二次世界大戦後といった区分である。「研究会」はいくつかの主題を初めて取り上げた。ときに反対もあったのだが、この点は認められるべきである。そうした主題としては、例えば「ナチズム期の図書館」、「1945年から1965年の図書館史」、「前ドイツ民主共和国の図書館史」がある。今日の「研究会」は、横断的な主題を好んでいる。例えば、「図書館が図書館建築に与える影響」、「さまざまな文化機関のなかの図書館：過去と現在」である。最新の2004年5月の大会の主題は、「1970年代と1980年代のドイツ図書館学：情報社会への途上」であった。なおセミナーでは、音楽図書館史、科学技術関連の蔵書の歴史、司書職の歴史などを取り上げている。

「研究会」は、歴史的主題と現在との関連を重視し、それは「未来は起源を必要とする」（Zukunft braucht Herkunft）という標語による。この標語はドイツの言い回しで「歴史は未来の形成に必要である」という意味である。この意味において、現行の問題も歴史を知ることと深く理解できるとの考えからプログラムに含まれている。

セミナーは図書館史研究の現状維持（status quo）と理論的基礎について定期的に取り上げている。そうしたセミナーには1979年の「学術分野としての図書館史」、1985年の「国際的文脈における図書館史研究」（これは以前の「国際図書館連盟図書館史ラウンドテーブル」、現在の「国際図書館連盟図書館史分科会」との共同企画）、それに1991年の「ドイツにおける図書館史研究プロジェクト：研究報告と課題」¹⁾がある。有意義で可能な場合、比較図書館史の理解を深めるために海外の研究者を招待している。例えばニュージャージー州ラトガーズ大学の故パメラ・スペンス・リチャーズ（Pamela Spence Richards）は、1988年、1989年、1990年に参加し、大いに感謝された。

国際団体と協力して開催した会議もある。例えば、「音楽図書館国際学会」（IAML）の文書・

ドキュメンテーション・センター、「科学の歴史と哲学に関する国際同盟」(IUHPS)のドキュメンテーション委員会などである。「研究会」は、イギリスの図書館・情報専門家協会の「図書館情報史グループ」と密接な関係がある。1993年に図書館史に関する第1回ドイツーイギリス・セミナーを、「文学のなかの図書館」という主題で開催し、続いて第2回目「普遍的な図書館：アレキサンドリアからインターネットまで」¹³⁾を、ロンドンで1995年に開催した。この合同企画はことのほか成功し、2001年秋の第3回セミナー「図書館のための慈善事業」に続いていった。なお、他の国の図書館史研究者とも合同セミナーを計画している。

これらの活動は出版活動と密接に関係している。大会やセミナーの論文は、シリーズ「ヴォルフエンビュッテル図書史」(Wolfenbütteler Schriften zur Geschichte des Buchwesens)に発表されるのが常である。現在までに、私たちは19冊を編集し、そのうち16冊がこのシリーズに含まれている。会議やセミナーの主題と同じことがいえるが、しばしば出版物は、特定主題に関する最初の包括的な業績である。このことは、特に以下の3冊にあてはまる。『国家社会主義時代の図書館』(1989、1992年)、『ドイツにおける図書館の発展：1945－1965年』(1993年)、『DDRにおける図書館史』(1999年)。これらはそれぞれの分野での基準を設定したのである¹⁴⁾。加えて、アウグスト大公図書館は「研究会」と共同して、隔年雑誌『ヴォルフエンビュッテル図書史研究』(Wolfenbütteler Notizen zur Buchgeschichte)¹⁵⁾を編集している。

目立ちはしないが、理事会は相談に応じているし、情報センターとしての役割も担っている。理事は国内外からの問い合わせに応じたり、そうした問い合わせを専門家に回したりしている。

「研究会」の活動が、ドイツにおける図書館史研究を発展させてきたと結論できる。図書館史は過去20年の間に、それ以前よりも進歩してきた。しかしながら、ポール・スタージェス(Paul Sturges)は1992年にイギリスの特徴を述べたが、そのことはドイツにもあてはまる。スタージェスは次のように記している。「……研究と資料組織化とのあいだには大きな隔たりが残ったままである。一方では、研究プログラムの創造能力や図書館史における明確なパラダイムの開発能力の点では、重大な弱点、致命的とさえいえる弱点がある。いま一方では、記録能力、書誌調整能力、情報源の問題を扱う能力は、大いにうまく発展している」¹⁶⁾。

「研究会」の当面の目標は、知識の歴史や科学の歴史との緊密な関係を通して、図書館の発展と図書やメディア史の学際的検討を強めることである。

8. 最新の動向

冒頭に述べた問題点にもかかわらず、希望に満ちた動きがある。以下に示すように歴史的主題への関心は大きくなっている。

- ・現場の図書館において、「喪失文化財」(Kulturgutverluste)とそれらの返還問題がますます重要になってきている。ドイツの図書館は自館の蔵書点検を行い、特に1933年から1945年を中心に、違法に獲得した蔵書の確認を行なっている。この作業には歴史の知識が必要である。
- ・2004年5月に行なわれた第2回「情報と図書館に関するライプツィヒ会議」において、数年の準備を経て第1回目の図書館史に関する継続教育ワークショップが開かれた。主題は

「図書館員の記憶」で、ドイツの図書館における国家社会主義（ナチズム）を扱った。関心はとても大きかった。

- ・応用科学総合大学や同大学の図書館情報学大学で、選択科目の図書史を選ぶ学生が増えてきている。シュトゥットガルト・メディア大学の場合、1つの学年の70パーセントに達する。

それゆえに、図書館史が再びひそかに大学に入ってくると楽観できるだろう。求められる図書館員とは、情報の技術と管理にたけるとともに、ドイツの言い回し「未来は起源を必要とする」という意味で、率先して己の職の起源を熟考する図書館員である。

付表1：ヴォルフエンビュッテル図書館史・図書史・メディア史研究会

- 1975 図書史研究会設立
- 1979 図書館史研究会分離
- 1998 両研究会がまとまる：図書館史・図書史・メディア史研究会
理事長：ペーター・ヴォドセク教授（シュトゥットガルト図書館情報学大学）
- 2003 理事長：ヴォルフガング・シュミッツ教授（ケルン大学図書館）

付表2：ヴォルフエンビュッテル図書館史・図書史・メディア史研究会：大会（隔年）

- 1980 * 19世紀の社会と文化の変化と図書館（ヴォドセク／リーバース）
- 1982 + 図書のための建築物（ヘニング／リーバース）
- 1984 * 啓蒙主義時代以来の国家主導と図書館（ヴォドセク／ケーグバイン）
- 1986 * 図書館と啓蒙主義（ヴォドセク／アルノルト）
- 1988 * ナチズム期の図書館（ヴォドセク／コモロフスキ）
- 1990 * 1945年－1965年のドイツにおける図書館の発展（ヴォドセク／レオンハルト）
- 1992 + ルネサンスにおける図書館と本（アキロン／アルノルト／ホアレ／ヴァイラウフ）
- 1994 * 都市と図書館：ドイツ帝国とヴァイマル時代における自治都市の職務としての文献提供（フリッゲ／クロッツビューチャー）
- 1996 * 前ドイツ民主共和国の図書館史（ヴォドセク／マルヴィンスキ）
- 1998 未来は過去に基礎を置く？ 1950年以降のドイツにおける図書館と図書館建築構想（ヘニング／ミットゥラー）
- 2000 * 協力と競争：文化機関のなかの図書館（ヴォドセク／レオンハルト）
- 2002 冷戦期における図書館、図書そしてメディア（ヴォドセク／シュミッツ）
- 2004 1970年代と1980年代：情報社会への途中で（ヴォドセク／アルノルト）

付表3：ヴォルフエンビュッテル図書館史・図書史・メディア史研究会：

セミナー（1979－1997年は年一回開催、1997年以来隔年開催、大会と交互に開催）

- 1978 図書館員の責任としての図書館史研究（リーバース）
- 1979 * 学術分野としての図書館史（ヴォドセク）

- 1980 + 図書館史の一部としてのコレクション（蔵書）発展の歴史（ビーネルト／ヴァイマン）
1981 + 図書館員の仕事の概要における変化（ヴァッスナー／ローゼ）
1982 18世紀と19世紀の公共図書館における読者と利用者（ラーベ）
1983 近代初期のプライベート・ライブラリー：研究問題（ラーベ）
1984 + 図書館における音楽資料の歴史（クリューガー／ミュンスター；IAML との共同研究）
1985 図書館における科学の歴史（クライネルト／ラインゴルト；科学の歴史と哲学に関する国際同盟のドキュメンテーション委員会との協力）
1986 ヴァイマル共和国における専門（学術）図書館（ラーベ）
1987 * 図書館の図像学（ヴァルンケ）
1988 * 第2回ナチズム期の図書館（ヴォドセク／コモロフスキ）
1989 * 技術と科学の図書館：その歴史と研究への重要性（ケーグバイン／シュミットマイヤー）
1990 18世紀のプライベート・ライブラリー研究（ラーベ）
1991 ドイツにおける図書館史研究プロジェクト：研究報告と課題（ヴォドセク）
1992 * 専門書と図書館における19世紀から現在にいたる数学と科学の発展（マイネル）
1993 * 文学のなかの図書館（ヴォドセク／ジェフコウト）；双方にとって、第一回イギリス・ドイツ・セミナー：図書館史
1994 19世紀と20世紀初期における読者と読書関心（アルノルト）
1995 + 普遍的な図書館：アレキサンドリアからインターネットまで（ツァーン／ジェフコウト）；双方にとって、第二回イギリス・ドイツ・セミナー：図書館史、ロンドン開催）
1996 * 1945年以来のヨーロッパにおける自治都市の専門図書館（フリッゲ／ボルハルト）、リュウベック
1999 + 本の価値：稿本と本の評価に関する歴史的実際の側面
2001 図書館のための慈善事業（ブラック／ホアレ／ヴォドセク）；双方にとって第三回イギリス・ドイツ・セミナー：図書館史

付表4：ヴォルフエンビュッテル図書館史・図書史・メディア史研究会：シンポジウム

- 1985 + 国際的文脈における図書館史研究（ケーグバイン；IFLA RTLH との共同作業）
1986 文化機関としての図書館（ヨッフム／レオンハルト）
2000 情報と共に知識へー知識と共に情報へ（ヨッフム／ゲーデルト）
2003 近代初期における知識体としての本と図書館（ラウテンベルク／シュナイダー）

* 印のレポートは『ヴォルフエンビュッテル図書史研究』に発表されている。

+ 印は他のシリーズかまたは逐次刊行物に掲載されている。

なお本稿は、2004年9月11・12日に開かれた日本図書館文化史研究会研究集会（於：京都精華大学）での発表論文である。

注

- 1) Bibliographie der Buch- und Bibliotheksgeschichte BBB). Bearbeitet von Horst Meyer. Bad Iburg: Bibliographischer Verlag Dr. Horst Meyer. Bd 1 (1980/81) - 21 (2001)
- 2) 図書と図書館史の現状について最も包括的で重要な文献は17年前に出版されている。Die Erforschung der Buch- und Bibliotheksgeschichte in Deutschland. Paul Raabe zum 60. Geburtstag gewidmet. Herausgegeben von Werner Arnold. . . Wiesbaden: Harrassowitz, 1987
- 3) すばらしい調査は以下を参照。Felicitas Marwinski "DDR-Bibliotheksgeschichte retrospektiv: Gedanken zum Gegenstand einer künftigen Bibliotheksgeschichtsschreibung". In: Zur Geschichte der Öffentlichen Bibliotheken in Österreich. Herausgegeben von Alfred Pfoser und Peter Vodosek. Wien: Bücherverband Österreichs, 1995. p. 29-46 (BVÖ-Materialien; 2)
- 4) 問題は20年以上前から悪性になっている。以下の鋭敏な論文を参考にする。Kenneth W. Humphreys "The two cultures in librarianship: humanities and technology" in: LIBER bulletin 21 (1983), p. 13-18
- 5) D F Gのホームページ (<http://www.dfg.de>) からの引用。「D F Gは Deutsche Forschungsgemeinschaft として国際的に知られている。そこには、もちろん、ドイツ研究議会／学会／財団 (German Research Council/ Society/ Foundation) のような翻訳があるが、我われは Deutsche Forschungsgemeinschaft が適切な名称であり、適切な名称は決まった翻訳にそぐわないと思っている」 ibd.
- 6) 3つのすばらしい例を示しておく。Ulrich Hohoff "Quellen zur Geschichte der Volksbibliotheken in Württemberg und Hohenzollern 1806-1918. Ein sachthematisches Inventar. Mit einem Beitrag von Peter Vodosek". Stuttgart: Kohlhammer, 1990 (Veröffentlichungen der staatlichen Archivverwaltung Baden-Württemberg; Band 40) — ある特定の地域での資料源の索引を作成する例。"Der Nachlass Erwin Ackerknecht". Bearbeitet von Fritz Leopold. Mit... einer Einleitung von Peter Vodosek. Marbach am Neckar: Deutsche Schillergesellschaft, 1995 (Verzeichnisse, Berichte, Informationen; 17) — 著名な図書館員の不動産の索引作成の例。Kellner, Stephan "Historische Kataloge der Bayerischen Staatsbibliothek München: Münchner Hofbibliothek und andere Provenienzen". Wiesbaden: Harrassowitz, 1996 (Catalogus manu scriptorum Bibliothecae Monacensis; Tomus 11) — 以前のバイエルン修道院の歴史上重要な手書き目録コレクションの索引作成の例。
- 7) cf. "Buchwissenschaft und Buchwirkungsforschung/VIII. Leipziger Hochschultage für Medien und Kommunikation". Herausgegeben von Dietrich Kerlen und Inka Kirste. Leipzig: Institut für Kommunikations- und Medienwissenschaft, 2000
- 8) Geschichte des deutschen Buchhandels im 19. und 20. Jahrhundert. Band 1: Das Kaiserreich 1871-1918. Teil 1: Frankfurt a. M.: Buchhändler- Vereinigung GmbH, 2001. -647p.; Teil 2: Frankfurt a. M.: MVB Marketing- und Verlagsservice des Buchhandels GmbH, 2003. - 703 p.; Band 2: Weimarer Republik (1918-1933); Band 3: "Drittes Reich" (1933-1945); Band 4: DDR (1945-1989); Band 5: Bundesrepublik (1945 up today)
- 9) パウル・ケーグバインは1986年にアウグスト大公図書館について報告した。"Two Centers of German Research Activities in Library History: Cologne and Wolfenbüttel," In: Journal of Library History 21(1986), 2, p. 456-473
- 10) Lexikon zur Geschichte und Gegenwart der Herzog August Bibliothek. Herausgegeben von Georg Ruppelt und Sabine Solf. Wiesbaden: Harrassowitz. 1992
- 11) Metzger, Philip A.: A New Library History Group is formed in Germany. In: Journal of Library History 15 (1980), 2, p. 199-200
- 12) Bibliotheksgeschichte als wissenschaftliche Disziplin. Beiträge zur Theorie und Praxis. Herausgegeben von Peter Vodosek. Hamburg: Hauswedell, 1980 (Wolfenbütteler Schriften zur Geschichte des Buchwesens; Band 7); Library History Research in the International Context. Libraries and Culture 25(1990),

- 1, 150 p. [Special issue]
- 13) Bibliotheken in der literarischen Darstellung. Libraries in Literature. Herausgegeben von Peter Vodosek und Graham Jefcoate. Wiesbaden: Harrassowitz, 1999 (Wolfenbütteler Schriften zur Geschichte des Buchwesens; Band 33); 第2回セミナーの議事録は以下に出版されている。“Library History“, vol. 14, no. 2 (Nov. 1998) and vol. 15, no. 1 (May 1999)
- 14) Bibliotheken während des Nationalsozialismus. Herausgegeben von Peter Vodosek und Manfred Komorowski. Wiesbaden: Harrassowitz. Teil 1: 1989. Teil 2: 1992 (Wolfenbütteler Schriften zur Geschichte des Buchwesens; Band 16); Die Entwicklung des Bibliothekswesens in Deutschland 1945-1965. Herausgegeben von Peter Vodosek und Joachim-Felix Leonhard. Wiesbaden: Harrassowitz, 1993 (Wolfenbütteler Schriften zur Geschichte des Buchwesens; Band 19); Geschichte des Bibliothekswesens in der DDR. Herausgegeben von Peter Vodosek und Konrad Marwinski. Wiesbaden: Harrassowitz, 1999 (Wolfenbütteler Schriften zur Geschichte des Buchwesens; Band 31)
- 15) vol. 1(1976)-
- 16) Paul Sturges: Library History. In: British Librarianship and Informaiton Work 1986-90. Vol. 1: General Libraries and the Profession. Ed. by David W. Bromley and Angela M. Allott. London: Library Association Publishing, 1992. p. 240